



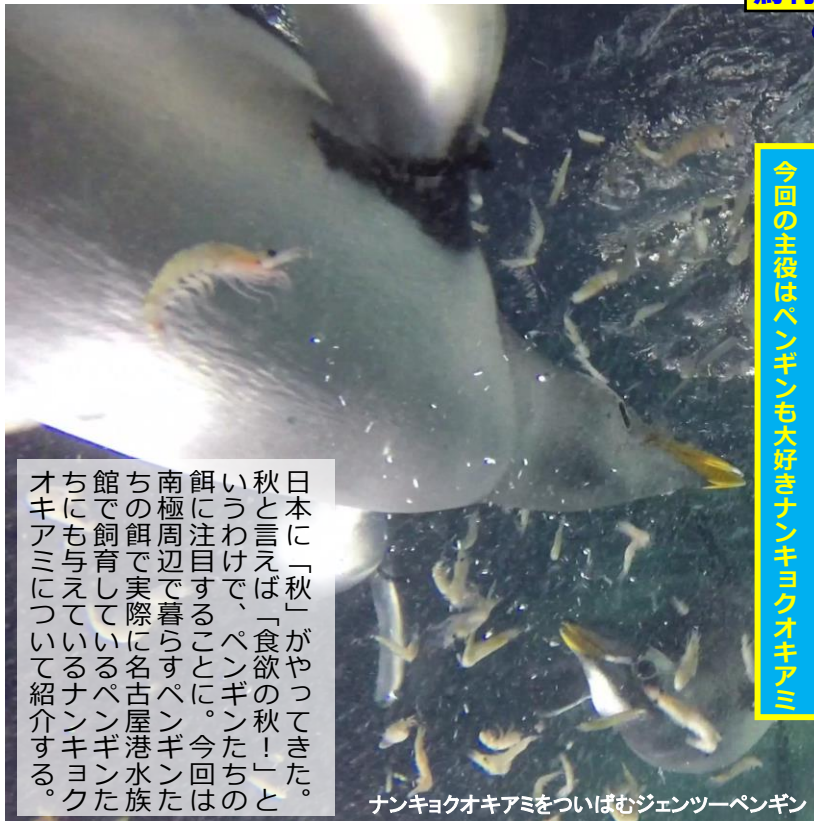
# 日本は今「秋」

(今南極の季節は逆の夏まじしくなだけ〜)

# 秋といえは「食欲の秋！」

# ペンギンたちの餌に「音」

今回の主役はペンギンも大好きナンキョクオキアミ



ナンキョクオキアミをついばむジェンツーパーペンギン

日本に「秋」がやってきた。秋と言えは「食欲の秋！」というわけですが、ペンギンたちの餌に注目することに。今回は南極周辺で暮らすペンギンたちの餌で実際に名古屋港水族館でも飼育しているナンキョクオキアミについて紹介する。

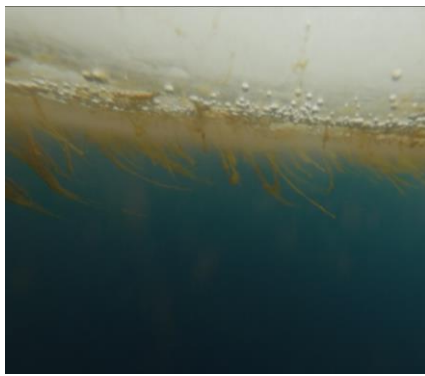
## ナンキョクオキアミ *Euphausia superba*

体長5cm程のエビに似た小さな生き物で、主に植物プランクトンを胸の足で濾し取って食べている。南極海の表層から中層で浮游生活を送り、その群れは数kmの長さにも達することもある。資源量は数億tとも言われ、ペンギンを始めクジラ、アザラシ、魚類、イカ、海鳥と多くの生物の餌となる。その変動が南極海生態系全体の安定性を左右することから「鍵種」と言われている。

名古屋港水族館 南館3階 南極ホールで展示中

来館者から展示しているナンキョクオキアミを餌としてペンギンに与えていると思われることがたまにあるとのこと。実際は展示用とは別に餌用のナンキョクオキアミを用意してペンギンに与えている。

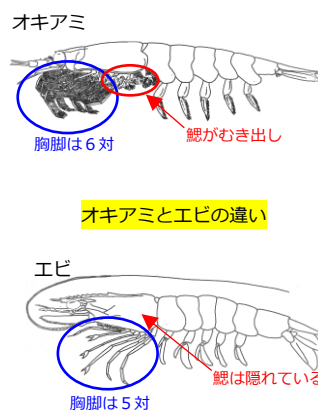
誤解されがち!?



海水下部にびっしりと生えているアイスアルジー (名古屋港水族館の飼育係が実際に南極で撮影)

植物プランクトンなどを餌としているナンキョクオキアミだが、南極の冬は「極夜」と呼ばれる1日中太陽が昇らない環境になる。すると植物プランクトンが増殖するのに必要な光が十分に海中に入らなくなり海中から姿を消してしまう。その間冬季には、動物プランクトンや海水中の植物プランクトン(アイスアルジー)等も摂食すると考えられている。アイスアルジーの生産の豊凶がナンキョクオキアミの資源量にも大きな影響を与えると考えられている。

## ナンキョクオキアミとアイスアルジー



エビとは似て非なる生物  
ナンキョクオキアミはエビの仲間と見た目がそっくりなため、よく「エビだ!」と思われるがち。分類的にはどちらも「甲殻類」ではあるがナンキョクオキアミは「オキアミ目」でエビは「十脚目」というそれぞれ別のグループに属している。また、ナンキョクオキアミは飢餓状態になると脱皮して自分の体を小さくし、エネルギー消費を減らす習性があることも知られている。

担当飼育係の声  
現在、名古屋港水族館では特別展「飼育係、南極に行く」を開催中です。実際に当館の飼育係が南極観測隊員の1員として調査に行きました。野生のアデリーペンギンやエンペラーペンギンも観察することができたそうです! (うらやましい) 現地での活動内容の紹介や採集した生物も展示しています。この機会にぜひペンギンたちが暮らす「南極」にも注目してみてください。水族館前には「南極観測船ふじ」もあわせて見学するのがオススメです。

光や水質の変化に弱く飼育が難しいとされるナンキョクオキアミだが、与える餌や南極に合わせた照明時間の長さなど工夫を重ねて、名古屋港水族館では2000年に世界で初めてナンキョクオキアミの飼育下での繁殖に成功。継代繁殖の成功によって常設展示を実現している。

継代繁殖に成功し、常設展示しているのは世界中でココだけ

地球温暖化やペンギンとの関係  
地球温暖化により、海水面積が少なくなるとその分「アイスアルジー」も少なくなったり、オキアミの個体数も減ってしまう恐れが。その分ナンキョクオキアミを餌としているペンギンたちの個体数にも影響を及ぼす可能性があり、実際に氷の張り出しが少なかった時期にはペンギンの繁殖成績が落ちてしまったという報告もある。もちろんペンギンだけではなく、南極海全体の生態系に影響を与えてしまうことになりかねない。